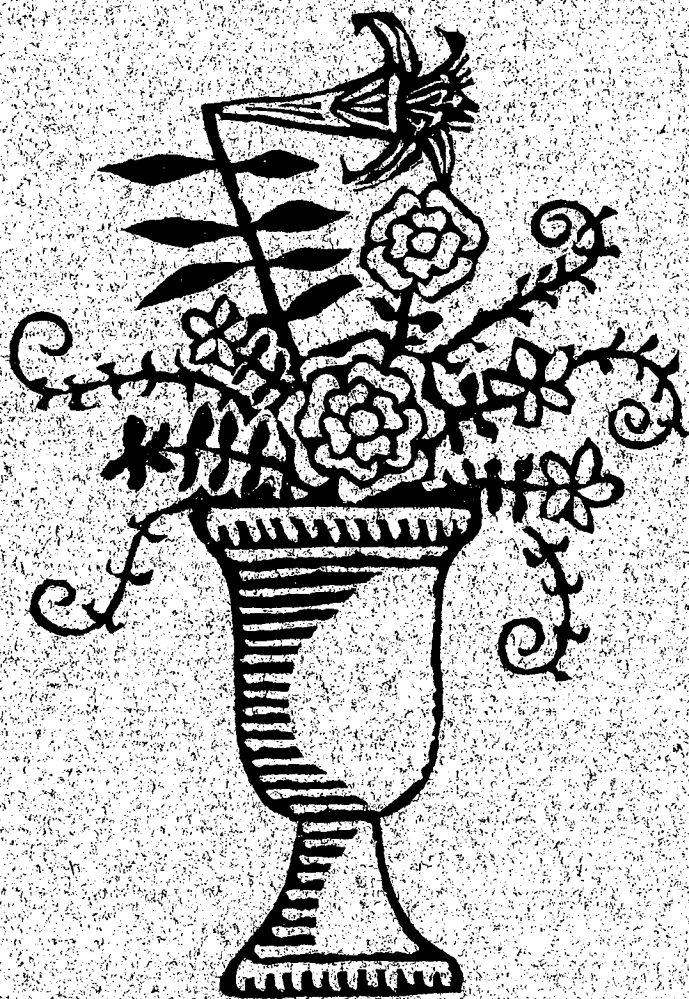


香葉



1993

NO. 22

目 次

講演会への御案内	1
学長あいさつ	小 玉 敏 子 2
会長あいさつ	古 城 房 子 3
退任あいさつ	下 田 哲 4
女専のページ	細 野 サト子 6
	前 納 順 子 7
	西 本 素 子 8
覚え書 一二十一	上 市 二 郎 9
合同同窓会報告	10
近頃の国文科	岡 松 和 夫 11
日々雑感	山 口 和 子 12
第1回奨学生	13
講演会要約	14
幼児教育科開設二十周年記念	中 田 弘 良 15
香葉室	16
“コーヨースポットライト”	
昔遊女の聞き書き	竹 内 智 恵 子 19
半世紀にわたる私の英語独学法	小 林 守 信 20
名簿発行案内	22
クラス会報告	23
県央のつどい	25
母校ニュース	26
決算・予算	27
賛助金	28

表 紙……………関 頼 武

カット……………漫画研究部



—韓国と日本の掛け橋—

『^オ ^{ソクファ} 呉 善花先生 講演会』

知っているようで知らない国

近くて遠い隣国を、身近かに感じてみませんか？



テーマ：『新たな国際化へ向けて』

日 時：1993年10月31日(日)

午後1時30分～

場 所：図書館棟5F・視聴覚室

▼講師の紹介▼

1956年 韓国済州島生まれ。^{オク}大邱大学に学ぶ
4年間 軍隊生活

1983年 渡日。

大東文化大学(英語学専攻)卒業。

東京外国語大学大学院に在籍中。

通訳・翻訳業・語学教師を経て、現在文筆業に
専念している。

▼主な著作▼

「スカートの風」

「続・スカートの風」

「新・スカートの風」

「日本のおごり・韓国のたかぶり」



今までのお願いした講演者及び演奏者(敬称略)は下記の通りです。今年もご期待下さい。

1985・永井 路子

1989・宮崎 安子

1986・鳥飼玖美子

1990・吉武 輝子

1987・田中喜美子

1991・吉屋 敬

1988・^{ハンドベルクワイヤ}
(三春台中・高校生)

1992・円 より子

★香葉会の部屋★ご案内

卒業生と在校生、教職員の交流の場として、又卒業生の部屋として3号館106号室にて、コーヒーとお菓子のサービスをいたします。お友達同志・ご家族お誘い合わせの上お立ち寄り下さい。

※ 10月30日・31日 両日とも開室いたしております。

※ クリスマスツリー・小物等の販売もいたします。

短大の近況

学長 小玉敏子



十八歳人口のピークが過ぎ、一九九二年に二〇五万人であったのが、二〇〇〇年には一五一万人になると予測されています。進学率の上昇に支えられて、かならずしもすぐ志願者数に跳ね返るとは限らないといはうものの、本学の志願者数は前年度に比べて全科平均十八パーセント減少しました。(英文科は前年に減少したせい、か今春は増加しています。)もっとも、昨年は異常に多かったのだともいわれ、一昨年とは大して変わりませんが、私共は、受験生が減らないよう、魅力ある短大にする方策を検討しております。

一昨年六月に短期大学設置基準が改正され、設置基準が大綱化・弾力化されたことにより、カリキュラムなどで各短大の特色づくりが容易になりました。同時に、教育研究水準の向上を図り、社会的使命を達成するため、自己点検・評価を行い、改善の努力をするところが義務づけられました。私共もさっそく自己点検・評価委員会を発足させ、実行可能なことから手を付け始めました。

家政科は昨年、時代に即応して三専攻の特徴をはっきりさせるようカリキュラムを改正しました。とくに生活文化専攻では「住」を中心とした内容にし、「二級建築士受験基礎資格」を得ることができるようになりました。この資格を取得し、卒業後二年以上「建築」に関しての実務経験」をすれば、二級建築士の試験が受けられま

す。

一九六六年(昭和四二)に開設されて以来、ほとんどカリキュラム改正が行われなかった国文科でも、来年度は新カリキュラムが実施されます。また、数年前に外国語の一つとして開設された中国語が増設されます。北京第二外国語学院から交換教授として横浜の大学においてになる先生にご担当いただいております。

パブルの崩壊に伴う雇用調整のため卒業生の就職状況が心配されますが、今年三月の卒業生は、就職課の指導と努力のお蔭で、希望者八百五十九名全員が就職できました。その大部分六百三十五名は事務職ですが、幼稚園教諭五十九名、保母三十六名、栄養士四十四名、公務員十三名も含まれます。

専攻科は現在英語専攻だけしかありませんが、短大の活性化と質の向上にも寄与すると考えられますので、順次他の専攻も開設することを検討しています。卒業生の皆様の生涯学習や再就職にもご利用いただけるかと思えます。昨年、英語専攻が学位授与機構の認定を受けてから希望者が増加して、昨年は定員十五名を満了し、今年は十三名在籍しています。専攻科で修得した単位を、科目等履修生として四年制大学で一定の条件の下に修得した単位と合せて、学位授与機構に提出し、試験を受けることによって、「学士」を授与される可能性が出てきたからでしょうか。

最近、四年制大学編入の希望者が増えましたが、短大の各学科長の推薦によって、関東学院大学の経済学部、文学部の三年次に編入する道が開かれました。経営情報科から経済学部経営学科に編入するばかりでなく、家政科在学中に経営情報科の科目も履修して、経営学科三年次に編入した人もいます。来年度から文学部英米文学科

と社会学科に、それぞれ英文科と幼児教育科から推薦による三年次編入が実現されます。

昨年、米国カンザス州のオタワ大学と姉妹校協約が締結され、英文科の卒業生はオタワ大学の三年次編入が可能になりました。今年三月の卒業生から四名が選ばれ、五月に出発しました。姉妹校協約締結以前の卒業生も現在三名がオタワ大学に在学しています。

外国人留学生は今年五名入学し、二年生と合せて七名になりました。昨年は香葉会から留学生に奨学金を頂きましてありがとうございます。今後ともご支援くださいますようお願い申し上げます。

会長あいさつ

会長 古城 房子



香葉会の事業は主たるものが四つあります。総会開催、機関誌発行、名簿作成、学生支援の為の奨学金支給です。総会は短大祭に参加の形で、講演会をしてきましたが、これは学内の先生方からも好評を得ており、今年は在日韓国人の呉女史をお招きしました。一番近い外国、韓国の女性の実情を、私は何も知らなかったことを女史の著書を通して教えられ、是非皆様に聞いて戴き、相互理解を深めて戴きたいと願っています。学内事情により、短大祭は、昨年迄の十一月三日を中心とした日程が変更になり、十月末の土、日に行われることになりましたので、今年十月三十一日(日)です。ご記憶下さい。

機関誌「香葉」を、今年も無事お届けする時がきました。どのようを受け止めて下さったか、送り手として毎年気になるところで、皆様の返信、投稿によって、ご意見ご感想、近況を知ることができ、誌上で一部を発表させて戴いておりますが、全部をおのせできないのが残念です。しかしこの返信によって、これを楽しみに待っていて下さる方も多いことを知ることができ、大いにはげみになります。秋の行事が終ると、すぐ来年の編集にとりかかり、方針が決ると、原稿の依頼、割付、校正、印刷発注、発送と九月初めまで、葛城委員長(国七)指揮の元に編集委員の仕事が続きます。何回も重ねる校正と二万冊に及ぶ発送事務が一番大変です。毎回、快く原稿を書いて下さる諸先生、会員諸氏、学校当局のご協力によって出来上がる小冊子ですが、実務は、蔭の地道な積重ねにあり、それを全面的にバックアップしてくれる、香葉事務局の洲上さん、益さんの働きがなければ、とても続けられない仕事です。今年は、その上に来春発刊予定の名簿の編集が加まりました。これは非常に根気のいる、時間のかかる仕事です。膨大な数になった卒業生の名前、住所はコンピュータ処理していますが、これを名簿にする場合の校正と、編集は間違いが許されない丈に、全部に目を通し、予想外のコンピュータのミスを文字通り手直ししなければならず、吉屋委員長(英二)の綿密な計画と指導のもとに名簿委員の方々の努力が積み重ねられております。住所変更の追跡調査、校正等には松本さんも手伝って下さっております。奨学金は昨年は中国、台湾の二人の留学生を支援し、誌上で、ご紹介しました。多くの方の協力と努力によって香葉会が支えられていることを心から感謝しています。(英一)

「摂理」と「いのち」

下田 哲



昨年（'92）八月末に学長の任期が満了となって退任し、本年（'93）三月末に定年退職となった。一九五六年四月に関東学院教会牧師となってから三十七年間、関東学院に関わったことになる。学院の専任教員として三十二年間、

女子短期大学の専任としては丁度三十年間である。ともかく一応の終りを無事に迎えることができて心より感謝している。何かに常に追われているような心忙しい日々を長年過して来て、今ようやく、少し自分の時間をもてるようになったなあ、という気がしている。女子短大における三十年間の自分の歩みは、未だ記憶に新し過ぎて余りふりかえりたくないし、特約教員として仕事はもう暫く続くので、何れ機会をみてまとめて見たいと思っている。

◇
今、私が最も強く感じていることは「摂理」（プロビデンス）ということである。「摂理」とは、神が今日の世界を個別的に又、全体的にその慈愛の手をもって保護し配慮し守護し給うということであり、個人、家庭、団体、民族等がこの地上の生と歩みとにおいて、必要なものを与えられることは勿論、その他すべての事が神の目的のために守られているとの信仰である。

「ハイデルベルク信仰問答」（第二十七）に「神の摂理という言葉によって、あなたは何を理解しますか」との問いに対しての答え

に、真に美しく言い表わされている。「神の全能な現在する力を理解します。この力によって、神は天地を、すべての被造物と共に、あたかもその御手によって保つように保ち、支配し給うて、木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、食べることも飲むことも、健康も病氣も、富も貧も、一切が偶然に私たちに与えられるのではなく、神の父としての御手から与えられるのです」。

実に美しく且つ適切な定義である。ここで特に注意しなければならぬことは、「摂理」ということを、いわゆる決定論や宿命論と同じような意味に理解してはならないということである。神と世界、神と私の関係は、機械的・法則的なものではなく「神の父としての御手から与えられる」ようになされるのである。それにもう一つ「摂理」の信仰は、本来「わたし」に対する固有の意味が問題であり、個人的性格がそこにあつて、第三者の入りこむことのできぬ面がある、ということである。摂理は人間の自由や責任を無視せず、徹底的にそれを問うのである。

世界の現実とは、むしろ神の摂理を信ずることを困難に感ぜしめるように事実には充たされている。それにもかかわらず、我々はこの世界の根底に神の愛の御手を信ずるのである。人間は、その制限された自由によって自己の周囲に異常な拘束を感じとり、不可解と不条理に充ちた環境を背負っている。そのためにこの世界を重荷としてその意味を問わねばならぬ場合が絶えず続くのであるが、その過程においてなお、神の慈愛と知恵を告白し、讚美することがキリスト者の途である。摂理の信仰は、現在の地平を平面的に見渡して納得することなく、又、過去を観察してそこに認められる支配原理を確認することでもなく、未だ見ることでできない将来に向かって、

予め備えられた恵みのあることを信じて、それに賭けて歩み出す決断である。「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている」(ロマ八・二八)は、この「摂理」の信仰の実際的原理を端的に、しかも力強く示している聖句である。

◇

思えば、私は自分自身の意図に反した途を歩まされて来た気がする。牧師の家庭に産まれたが、幼時から私は鉄道技師になるつもりであり、機関車の設計・製造することが夢であり、それ以外のことは考えもしなかった。しかし、戦争とそれによる家庭環境の激変によつてその願いは叶えられず、結局、牧師となり、キリスト教主義学校の教員という途を歩んで来た。「土の器」であるにもかかわらず「宗教主任」として、又、「学長」という重責をも負うことになった。考えてみると、本当に不思議だと思わざるを得ない。常に孤独であり、戦いの日々であった。「神があなたをよびたもうた時、あなたは、ひとりでその召しに従わなければならなかった。あなたは戦い、又、祈らなければならなかった。又、あなたは、ひとりで死に、神に弁明するであろう。あなたは自分から逃避することはできない。というのは、神ご自身が、あなたを選び出したもうたからである」(D・ボンヘッファー)。

「神の召し」とは、神と神を信する人との間に常にその人の、今、此処において起る特別な出来事である。この意味においてこの出来事は、全く個人的な他者の計り知るを得ない出来事である。彼が良く行動したか悪く行動したかということは、彼自身と神だけのほかは誰も知り得ない。ボンヘッファーの言葉の重く深い意味をくりか

えし吟味して来た日々であった。私は、私なりに私自身の『イエス・キリストに従う』途の実践の場所として、女子短期大学で働かせて頂いたと思つてゐる。

◇

K・バルトの KD 1V/2 中の第66節『十字架の替れ』の最後に引用されている P・ゲルハルトの詩がある。

Christenkreuz hat seine Mäbe
Und wird endlich stille steh'n.
Wenn der Winter ausgezehret,
Tritt der schöne Sommer ein;
Also wird euch nach der Pein,
Wer's erwarten Kam, erfreut.

(われらの十字架には限りあり
やがて来らん その終りの日
冬の白雪降りやまは
われらは迎う うるわしの夏の日
待つことを知る者には
苦しみの後に喜びあり)。

今、私は大変おがましいかも知れないが、この詩に歌われているような、ささやかな満足を抱いた心境である。

同窓会の皆さんの今日までの御支援を心より感謝し、御健康と御活躍をお祈り申し上げます。

女専のページ

桜の花に想う

細野サト子

桜の開花が発表されてから十日も経つてあろうか、近くにある小学校の門の脇の太い桜の木も既に散りはじめていて、寒い寒いといっていた頃からみれば嘘のような季節となつてしまつた。いつも桜の咲く時期がくると、今年こそは高遠の桜を見にゆこうとか、岐阜の淡墨桜を是非みたいと思ひながら、ついテレビというものに頼つてしまつてそんな計画も忘れたようになってしまふ今日この頃だ。

我が家の猫の額ほどの庭には今椿が終り、木蓮がいっぱい花ひらき、そのすぐあとにリラの薄紫の花がよい香りをただよわせて三本の木にびっしりと咲いている。四、五年前に札幌の雪祭りに行つて、たしか真駒内から札幌に戻る途中、枯れたような太い幹のリラの木を道路の両側に見たときに、リラの木は随分大きくなるものだなあとびっくりしたことがある。この薄紫の花が次第に色あせてくと次にもっと濃い桃色の八重咲のようなり

ラが咲き始める。とても重たそうに少し頭を垂れて咲く。まだひらくまで五、六日はかかるだろう。この種類は香りが無いがとても美しい。二階から見ると蕾の穂先が一日毎に濃くなりふくらんできてたのしみである。

さて桜の咲くこの頃になるといつも旅のことが思い出される。小学校の頃卒業して間もなく希望者だけの修学旅行で吉野へ行ったことである。戦前の小学校の国語の授業で、「青丹よし、寧楽の都は咲く花の、匂うがごとく、いまさかりなり。」今考えればその頃の小学生は随分難しい文語調の文章を習つたものだと思心するくらいである。これに端を発して、南北朝の歴史の授業がからみ、ますます京都、奈良が好きになり、はては吉野への修学旅行で僧兵の陣どつた藏王堂とか正行の辞世が書かれた堂の扉とか、とにかく一目千本の桜の名所であり、歴史のロマンを秘めた場所として、その頃の私にはとても大切な場所となつた処である。女学校の頃にも修学旅行で再び吉野を訪れ、又教職に就いてからも学年の旅行で南紀白浜から三度吉野に足を運んだ。学校休みの三月末か四月の始め頃だつたと思う。今から三十年も前のこと。東京駅を発つとき、前日までの大雪で震えながら列

車に乗り、翌朝紀州の尾鷲についたが、そのときの南紀の海の色と、大陽のまばゆいばかりの光には圧倒されてしまい、あのときの驚きは今も鮮明に憶えている。さてその吉野を訪れたとき、まだ寒くて開花はしていないが、だが、何気なく見ると、中学生らしい三、四人の女生徒がござの上に座つてピクニックまがいのことをしているのに気がついた。色々学校の話や学年などをきいて写真を撮り、帰宅してから彼女らの住所宛にそのスナップを送つた。そしてその折全山開花のときは素晴らしいということもきいた。事実あれだけ桜の木があるのだから想像にかたくないことも充分わかつた。あのような季節、全山静まりかえつて桜の蕾が日増しに綻ぶとき、何か音でも聞こえるのではないかと思はれるくらいの静寂を感じとつたものである。

写真を送つたが何年経つても返事がこなかつた。家庭科の教師と二人で、どうして届いたくらのい返事が来ないのかと話し合つていて、三、四年も経つたある日、彼女等が高校の修学旅行で東京に来ることになり、旅館でぜひ会いたい旨の葉書が届いた。私とその教師は顔を見合わせ、「失礼で勝手な話ね、行くのやめましょう。」ということになった。

そのときのネガはどこにあるか忘れてしまつたが、彼女らももう四十才をすぎた年になっている。でもあの頃は、都会の騒音をよそにこんな静かな場所でのんびりとおしゃべりができる女生徒は幸せだと思つた。桜の花が咲く頃はいつもあの吉野の桜を思い出す。

(女専英一)

老いて益々筆碌

前納順子

学校を出てから四十年余り、英語はすっかり忘れ果て、母国語の字さえおぼつかないこの頃、何しろ毎日頭脳労働とは縁の遠い日々を過しているの、「何か書け」といわれてとまどっています。

物質的には貧しかったけれど、その分心豊かだった私達の遠い日の学生時代。暖房設備のなかつた三春台校舎の冷氣、寒風に、オーバークートを着たまま教室に座っていたあの頃のことは、今の若い方々にはとても想像のできないことだろうと、懐しく思います。

いろいろな会合に出ると、以前は私より年上の方ばかりだったのが、だんだん同年輩になり、今では殆ど年下の方ばかりになつてし

まいました。それなりに生きて来たつもりなのですが、馬令を重ねるとはこのことかと、しみじみ思う此の頃です。

還暦を過ぎて少し惚けてきたのでしようか、今の世の中変だなと感じながら、ついてゆくのやつとで、毎日大変です。親がかりの学生さんが、何万もするブランド物の洋服やバッグを持っているかと思うと、ポストン、ショルダー、ハンドバッグ等々、十点揃つて一万円とか、何が基準になっているのかわからなくなります。デパートのブライスカードを見てゾツとするのは私だけなのでしょう。こんな事で驚いているのは、年をとつた証拠なのでしょう。

六五才をすぎて年金を頂く身の上になりましたが、毎日健康でいられるのは何より有難いことだと思えます。私事を少し書かせて頂くと、私は殆ど寝込むような病氣もしないで、週に五日間新横浜のスケートリンクに通っています。一九五七年から一九六六年まで全日本選手権連続優勝、オリンピック選手だったコーチの方に、手取り足取り毎日三十分のレッスンを受け叱咤激励されながら、楽しく又時には思うように体が動かず、悔し涙を流して、もう十五年もフィギュアスケートとアイスダ

ンスを続けています。

この年で何を今さらと、他人が見たらきつと変に見えるだろうと思ひながら、何処が痛いとか、怪我をすることもなく、やめるきっかけがないまま、とうとう今日までできてしましました。

遊ぶ目的だけの為に、定期券を買つて毎日きまつた時間に出かけて行くという事は、現役主婦の私としては、かなりきびしいものがありますが、それはそれなりに心と体の健康に、この上なく好い事だと思っています。

氷の上に立っている間は、雑念はすべて吹きとんで、滑ることだけに専念出来るのです。年をとつても甘やかさないで、手入れをしなから使えば、人間の体も、結構頑張れるものだ、身をもって感じるこの頃です。そして週に五日間、一日に二、三時間、この年齢で氷の上にいられる丈夫な体を与えて下さった、神様と両親に感謝の念でいっぱいです。

皆様も元気に何時までも若く、百才百才の金さん銀さんとまではゆかなくても、負けないう毎日をおくりましょう。

(女専英二)

奉仕のよろこび

西本素子

一年前のこと、関東学院大学「いのちを支える会」の国際ソロプチミストングマソサエティ認証式典に出席する機会を与えられひびしぶりに大学の門をくぐりました。B・L・ヒンチマン院長におめにかかり、礼拝堂に坐した時私は卒業してから四十余年の歳月が流れておりました。式典がはじまり私は幸せで胸が一杯になりました。

それは全く考えもしなかったことで今では私の心の片隅に小さな痕跡をとどめていたものでした。それがこの礼拝堂で私の中で光り輝きはじめてのです。この時の感激を心にとめようと思っておりました頃原稿の依頼をうけまともてみました。本当にそれは自然でした。とても居心地のよいものでした。故郷に帰った安らかさと等しく心豊かな一時でした。女専在学当時悩む青春に出会うことなく卒業した私は何を教えていただいたかもふりかえることなく前進しておりました。六十才過ぎて改めて学院の空気にふれた時今迄忘れていた心の原点を見た思いでした。私の人生はここより出発しているのだと言う実感を得た

とき教育の尊さを感じました。成長期にあつて育成された事柄はその時何の感銘をも受けてなくても脈々と流れつづけているのを知りました。教育とはこれだとしみじみ思い、短い期間でも学院の中に席を置いたことを今更ながら感謝したのです。

現在私は国際ソロプチミスト会員として、嬉々として活動しております。私に最も適した仕事なのです。国際ソロプチミストとは、職業を持つ女性が集う国際奉仕団体でその奉仕はあらゆる分野に分かれて活動しております。この仕事に無上の喜びを味わうことが出来ます。これは学院で学んだ「人になれ、奉仕せよ」の精神が根本にあつたからだと思えます。

それが「いのちを支える会、骨髄バンク運動」との出会いになり、ひさしぶりで過去をなつかしく思い卒業以来はじめての同期会に発展いたしました。現在の皆様からは想像出来ないような女専家政科三期は九名のささやかなクラスで、当時は教育行政の改革期にあたり短大家政科一期と合同授業でした。皆、一生懸命に生きて人生の花を咲かせました。後は社会より受けた沢山の恩恵を少しでも還元することにつとめます。

そしてもう一つ、現在私が神の存在を無糸

件に信じ受け入れることの出来るよろこびは何物にもかえがたい宝であり、その原点が学院の教育にあつたことを思う時、ここに改めて御礼申し上げる次第です。

(女専家政三)



「知っていますか？」

若い卒業生にとって、この「女専のページ」って何かなって考えたことはありませんか？

短期大学の前身である、女子専門学校は、昭和二年に三春台校地で開校された戦後まもない女子教育の学校なのです。毎号ここに投稿された諸先輩方が我々短大生の基礎を作ったと言っても過言ではありません。

毎年、このページを楽しみに……。

覚え書(二十)

——女専・短大小史——

上市二郎

平成五年(一九九三)を迎え、短期大学となって四十三年、戦後三春台校地で女子の高等教育を始めてから数えると既に四十七年の歳月が流れた。つくづくその早さに驚かされる。学院の歴史上初めて女性の学長が昨年誕生し、大学運営が順調に進み、益々発展しつつあることは大変に喜ばしい次第である。ご承知の如く男子校として長い歴史を歩んできた学院の中に、初めて女子教育を取り入れて今日に及ぶまでには、幾度かの苦難の時代があった。

今記述しつつある時代もその一つである。なお、当時の教職員が如何にその時代を乗り切ってきたのか、種々の行事等に携わる様子をくどくど書くことは記録上許してもらいたい。

さて、前置きはこのくらいにして、前号では昭和三十二年度末、コールド先生が帰国されることになって、その送別会が二月に開かれたところまでであった。

いよいよ卒業期を迎え、式当日の役割分担が発表された。当時は少ない人員で色々と兼務しながら役をこなしたもので、次のようになつていた。(敬称略で記す) 司式は柳生直行・卒業生氏名発表は私・会場係は井口安喜子、永野敏子、鳥越ノリと私、受付案内と接待の係は小滝奎子、柳生直行・卒業証書の点検は楢垣好子が担当。そして三月十四日(木)には卒業礼拝を行ない、説教者は山北多喜彦先生だった。翌十五日(金)に卒業式、式終了後隣接したサンヨーホー

ルで父兄方、諸先生、学生達のお茶の会が催されていたのを記憶する。この年の卒業晩餐会はニューヨークランドホテルで開かれた。

この頃はよくスキー実習が行われていた。前年の暮れも実施されていたが、多分旧教員の門根静子先生の関係で捜真女学校と共催だったような気がする。処で三月二十四日(日)から二十七日(水)にかけて妙高高原池の平スキー場で実施。これは先生方有志で企画して行なった。このスキー場は参加したことがあるが、初心者向けもありスロープもなだらかで大変気分の良い場所だった。

英文科に専攻科英語専攻十五名の認可があったのもこの頃である。専攻科については前述したような記憶があるが、前年の秋に申請書を作成して文部省へ提出した。その折家政科は栄養学担当の専任教授が不足しているとのことと申請書類を取り下げた経緯がある。栄養学担当の教授を是非補充してもらいたいと再三理事会に申し入れをしたが、当時の経営状態からみて専任者を増員することは不可能とのことと残念ながら申請書を取り下げざるを得なかった。そのため英文科のみ認可され、この年の四月から英語専攻が発足した。本誌十九号でも述べたように、三月三十一日付をもって短大発足当初から六浦校地で授業を行っていた経済科と工科は廃止となった。

大下繁喜先生がこの三月末をもって退職した。女子専門学校及び女子高等学校時代から英文科の先生として活躍し、先生独特の教え方をなさるので古い会員の方々はさぞ印象に残っていることと思う。英文タイプ練習方法も独自のものを持ち、またスポーツマンでバスケットボールを指導されたり、短大祭の折クラス対抗バレーボールの教員チームのリーダーとして活躍したことなどを思い出さう。四月初めに関東学院葉山小学校に於て大学と短大の教員研修会が

開かれた。天城山荘で実施していた教職員研修会を、教員だけで近

くの施設を使って集会できる場所として選ばれたのである。比処は啓佑学園だったが、経営上、昭和三十年頃学院が吸収して宿泊設備を整えて学院葉山小学校として発足した。本館は明治時代の木造洋風の絵になるような建物だった。森戸海岸が近く夏は学院の教職員の家族利用も多く思いでの場所だった。昭和四十年頃まで続けられていたが、色々の事情（後に詳しく述べる予定）が生じて現在は装いも新たになって大学セミナーハウスとして使用されている。

毎年のことながら年度初めに学年主任（敬称略）が発表され英文科一年兵藤正之助、二年永野敏子、家政科一年井口安喜子、二年鳥越ノリ、英文科第二部一年柴三九男、二年小玉晃一の諸先生だった。そして此の頃新しい図書館の研究室の割り当てが発表された。部屋数は二ッ半室とのことで余り少ないので不思議に感じた。第一室は一般教育で兵藤先生と安藤先生、第二室は英文科で柳生先生、小滝先生と永野先生、第三室は半室で衛立てで区切って英文科第二部の光畑先生と小玉先生だった。

またこの頃新入生歓迎会を学外で懇親会を兼ねて行なった。最初は逗子海岸の養神亭を使う計画で、学生は京浜急行逗子海岸駅前に九時半集合と予定した。処が楢垣先生の知人の関係とかで急遽変更され、鎌倉ホテルで四月二十四日（水）に開催した。学生は一一九名の出席があった。先生方全員が参加したが、薄暗い大広間で文連や体連の紹介などがあったのを思い出した。短大の歴史を通じて学生数の一番少ない時代であったことが良く分かる。

経済科・工科の廃止に伴い五月三十一日（金）の理事会で短大の名称変更が決定、関東学院短期大学となり再び独立の形を整え、学長

も白山源三郎先生に代わったのである。

合同同窓会報告

今年の関東学院同窓会評議員会（合同同窓会総会）は六月二十七日（土）、相生本店で開催。香葉会から八名の評議員が出席しました。会長は、六葉会会長の田野井氏が、四期を務められます。司会は、燦葉会の小後摩氏で、来賓として、石田新院長（六月一日付）短大小玉学長、長島理事が御出席になりました。石田先生から院長としての御挨拶と六浦中高の校長として学校のお話があり、小玉学長からは短大の現状について、長島理事からは学校全体の動きについてお話がありました。その後評議員会組織にうつり、議長を檄會会の矢沢氏、書記に六葉会の板倉姉に決まり、報告事項にうつり、幹事長より平成四年度の事業報告、決算報告、監査よりの報告、各部会報告更に審議事項にうつり、今年度の事業計画、予算案とあまり質問もなく、わきあいあいのうちに会を閉じました。今年の同窓会の大きな事業は、会則の検討があります。各部会より二名づつと、会長、幹事長が加わって、会則検討委員会が発足し、いままでの会則をもう一度見直そうということで現在までに三回ほど検討委員会がもたれました。同窓会は、学校があつて成り立つものですから学校側の意向を充分伺って、学校の発展を援助し密着した協力体制をとっていくために、全員が納得できる会則を作り、同窓会相互の親睦が図れる会に育つよう努力してまいりたいと思います。今年もまた学校法人との懇談会をもって交流を深めて関東学院同窓会として力をつけていきたいと思っています。（相吉記）

近頃の国文科



岡松和夫

私は一九八二年（昭和57年）から国文科長を続けている。私は今年六十二歳、あと三年半ほどで定年を迎える。

私が今も科長を続けているのは、私より二歳年下の山下登喜子教授、十二歳年下の千葉義孝教授がたて続けに亡くなられたからである。千葉教授は四十代半ばの早世だった。

幸いに近代文学担当の岩佐壮四郎教授が一九七九年（昭和54年）から就任しておられて、助けてもらうことが多い。

それでも、他のどの科よりも早い世代交替が進んでいる。現在の専任教員は、上代文学の岸正尚助教授、近世文学の牧野ひろ子助教授、国語学の伊東光浩助教授、近代文学の高橋敏夫専任講師、それに書道の篠崎貞子特約専任講師を加えて計七名である。

一方、学生数は一学年約百九十人である。クラスも四つある。国文科創設期の一学年約百人時代を経験しておられる卒業生は、随分人数が増えたと驚かれるに違いない。

科の方針は創設以来変わらない。古典文学も尊重しているが、明治以後の近代文学の比重が他大学の国文科に比べ重い。二年生の「近代文学演習」が必修であり、最後に提出するレポートを、学生たちは「卒業論文」と呼んでいる。

学生たちのレポートのテーマとなる作家について今年三月の卒業生のを調べてみたところ、太宰治が一番多かった。これは昔から変わらないのではないか。次が芥川龍之介、谷崎潤一郎ときて、その次は向田邦子だった。この後、森鷗外、井上靖、三島由起夫……という具合になる。

向田邦子が目新しいところか。若い作家では吉本ばななを論じている人が四人いた。約百九十人の学生が六十人ほどの文学者を対象に四百字詰原稿用紙二、三十枚のレポートを書いている。これは、文章力をつけるためにも相当に役立っている。

近頃の国文科の目新しい点と言えば、学校全体の国際化の動きに進んで協力していることだろう。

本学はキリスト教を根幹に据えた大学であるから、英文科を中心に英語圏の国との交流が盛んである。これはキリスト教主義短大と

しては看板の一つと言えるものだ。しかし、国文科が腕をこまぬいているのも残念である。私は一九八一年の後半の半年間、ブラジルのサンパウロ大学に国際交流基金から派遣され、ブラジル人学生に日本語や日本文学を教えた。この経験を生かして初めはブラジルの大学との交流を考えたが、四年制大学でないと、なかなかむずかしい。

そういう時期到北京第二外国語学院（外国語大学）日本語科の卒業生である梁愛蘭さんが日本語に一段の磨きをかけるために留学生として入学した。しかも、岩佐壮四郎教授の兄になる岩佐昌暉氏（現在九州大学教授）が七年間も北京第二外国語学院の日本語科の客員教授で、梁さんは教え子の一人であることが分かった。

こうして、国文科は北京第二外国語学院との交流を始め、今では本学の外国語に「中国語」を加えてもらい、梁愛蘭さんに中国語の講師になってもらっている。北京第二外国語学院は横浜商科大学との交流があるので、ここに来ておられる先生たちにも頼んで、今年は全学で三クラスの中国語講座を開いている。留学生も積極的に受け入れ、今年是中国から二名、韓国から一名が入学した。



山口和子

平成五年度の
新入生の皆さん
は、四月のオリ
エンテーション
を機に、早くも
学生生活に馴染

じみ、二年生との見境がつきかねるようになった。短大では入学の年と卒業の年しかないので、最近は何日が何んとなく慌ただしいためか、学生気質の移り変わりによるのか、授業時間以外に皆さんと、ゆっくりお話できる時間はめっきり少ない。以前はいろいろとお話する機会がもっと多かったように思う。年齢のせいや身辺の情報過多に思いのほか翻弄されているのか、時の流れが加速度的に早まるように感じられ、過ぎ去った日々が懐かしい。

懐かしいといえば、去年の暮あたりから、中高年世代で話題になっている「清貧」ということばとの再会である。

この度の話題の発端は、中野孝次先生の著書「清貧の思想」によるようである。書名に惹かれて、近くの本屋さんに出かけた時には

既に十版を超えていた。私の二十歳初めころ宗教学の梅原眞隆先生や花山先生の連続講義の中で「清貧」という言葉は「無一物・無尽蔵」「大道無門」などと共に伺ったことがあり、その真髄はほとんど理解できたはずなのに、印象深く時どき思い出していた。

読みやすい文章の「清貧の思想」を通読しながら、同感々々とは思えけれど、果たして正しく解釈しているか否かは疑わしい。

今年度の入学式で小玉学長が辞書の一部に引用された時、かつて家政科の授業の理化学的要素に並行して精神文化面の大切さも採り入れようと教養教育をめざす生活文化専攻の科目に、御専門の他学科の先生方に授業を担当して頂いた時期があった。その折、国文科の岡松教授は日本人の精神文化の「わび・さび」のころ、「方丈の庵」に住まいする心の在りようなどを、幾つかの詩歌に託し、茶道よせて講義して下さった。学生と一緒に聴講させていただいた私は、我が国の精神文化とは何と贅沢でオシャレなことか」とひどく感動したことを思い出していた。

「清貧の思想」の中にも登場する「良寛」を敬愛してやまなかったと言われる北大路魯山人は「食器は料理の着物である」といい、生

前自ら陶器も製作され、料理も作られた。陶器には奔放なまでの情熱が感じられるのに、いったん、料理が盛られると、陶器と料理が一体化して華麗で雅びた一品に変身してしまう。ひょっとすると、清貧の思想の中には、奔放なまでの情熱といった「強さ」や「創造性」、「優しさ」が融和して内在するのではないかと思ったりしている。

料理といえば、魯山人におよびもつかないが、元来、私には外食したり、出前料理を取り寄せる習慣は殆どない。突然の来客には有り合わせ材料の手作り料理で済ましてしまうのが常である。前以て分かっているお客様には、何を作ろうかと考える仕儀になる。かれこれ二十年近い共同研究は私宅で行うことも多いが反射的に食事を作り、今も手作り習慣は変わらない。そんな都合もあって、猫の額ほどの庭に四季の花々、青紫蘇、みょうが、芹、三つ葉、山椒、柚子などを雑然と植えて、利用できるささやかな贅沢に、たあいなく満足している。そして、人生も終盤に入り、これからは何かと身軽で、さわやかなシンプルライフを楽しみたい心境で、身辺の整理を始めた此の頃である。

第一回奨学生



私の短大生活

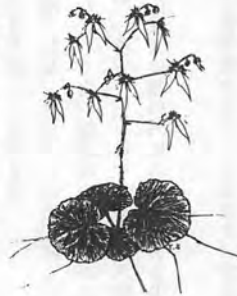
陳琼芳

私はこのとても落ち着いた雰囲気の学校で勉強することができてほんとうによかったと思います。

国文科を専攻したことによっていろんなことを知りはじめた、たとえば日本の学生が李白、杜甫の詩を知っているのは驚きました。中国の文化は日本にどんな影響を与えるのか、それもはじめてわかりました。ほんとうのことを言うと、国文科の授業は私にとってどの授業も越すに越せない高い山のように思えました。わたしの悩みはただひとつ、自分の日本語の基礎がじゅうぶんにできていないということです。

どうしたら、専攻の授業に追いついていくくらいのレベルに、自分の日本語の力を上げることができるでしょう、不安の気持ちばかりでした。でもクラスの友達や先生方は私たち留学生のことを気づかってくれています、どうやら、すべての学業を順調に修めることができました。ほんとうに心から感謝しています。特に国文科の岸先生の「ほうれんそう」に大変お世話になりました。「ほうれんそう」と言えば、ほうこく、れんらく、そうだんの

ことです。それのおかげで私の短大生活は楽しく過ごすことができました。そして、むこうへ帰ったら、また日本文学を勉強しつづけてようと思います。



同窓会では、昨年度から新事業として、日本に留学をしている海外からの学生に対し、奨学金制度を設けました。その中で昨年は国文科に在籍し、勉学にはげむ二名の方が第一回奨学生となりました。陳琼芳さんより、
香葉への投稿を上記に記載しております。
又本年は、第二回の奨学生として二年生（英文科 徐維玲さん・家政科 楊淑芳さん）を選出いたしました。皆様の御支援をよろしくお願いいたします。

（写真は右から、陳琼芳さん・夏朝さん・古城会長・学生課長 北田良雄さん・湧上事務局です。）

円より子先生講演会

— 現代女性と家庭 —



要約 蜂谷弘芳

夫と妻、両方が長生きするようになって、日本では、男性七十六歳、女性八十二歳、従って結婚生活は五十年余り一緒にいることになりました。

欧米諸国では六十歳から八十歳位まで平均寿命が延びるのに大体二百年位かかっています。

長い人生ですから唾み合いながら暮らすより、せつかく縁あって、愛し合うようになったのですから、相手と関わり合う大切さを大事にしたいものです。夫婦の在り方も、お互いに人生が延びて、ライフサイクルが変化してきています。どういうモデルが良いかというのがあります。夫婦の在り方というものを努力して造り上げていく時代です。

役割だけに終始せず、安心、愛着、信頼が保てるように一番大切な時間を生かして下さい。

専業主婦で、特に子育てをやっていますとところで虐待が多くなってきたことが判明しています。母子家庭ではなく、夫がいないという事です。妻がちよっと何か心配事がある時、また楽しい時、夫が応えてくれれば、安心しますが、いないと、母親の不安感が大きくなると、子供はいうことをきかないで、泣いてばかりいるので、0歳の子供まで叩いたり、ぶったり、つねたりします。

家族の効用、受容してくれる夫、同志としての「つれあい」というつながりをよりベターに。なぜ一緒にいるのか、家庭での人間関係を大事にする為という、心して夫婦を保つ発想で下さい。主婦は「woman」を持ちながら、家庭での役割を果たしているわけですから、否定してはいけません。「おまえがいるおかげ」という感謝の言葉をかけてあげて下さい。

総務庁の老人対策室の全国調査では、一に健康、二に夫婦関係が良いことを挙げています。

離婚講座を聞いて十三年半、離婚二〇番という無料電話相談を八年、離婚した女性たちのネットワークを開いて十年になります。

離婚願望の中、高年が増えて、三十歳が一番多く、二十歳、四十歳、五十歳、六十歳台の順序です。問題をかかえていることプラス離婚できる気力のあるうちという年齢です。我慢も若い夢のあるうちにできますが、夫の面倒が看れない程に、妻自身も体力が衰えて、最後には心安らかに暮らせる日々が欲しくなります。

専業主婦が全ての掃除、洗濯、炊事、育児、その他、何もかもこなして、夫の給料は誰のものかという、総理府の統計による全国アンケートでは、「夫と妻」の二人のもの、という答えが八割を占めるデータがあります。日本の法律では原則的に名義人である夫のものです。

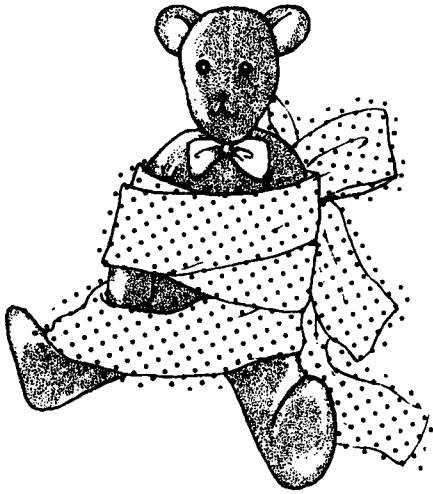
今、現在、共働きの世帯数は全世帯数の三二・八%です。男女平均賃金は歴然として差がありますので、やはり稼いでくれる人がいい。

民法七八六条へ離婚による財産分与：①協議上の離婚をした者の一方は、相手方に対して財産分与を請求することができる②……

③……

平成三年あたりで十七万件の離婚したケースでは、半分は慰謝料も財産分与も何ももらわず零で別れています。あと半分の女性たちは使い古した物をお金に換算して、現金も含めて、せいぜい三百万円位でした。平均結婚生活二十年以上で、五十五歳位でやっと五百万円～六百万円位です。この民法は農業人口が圧倒的に多数を占めていた時代で、土地を分けてしまうと日本の産業が成り立たないという時代でしたから、財産分与の制度が財産分割にならなかつたという背景があります。女性の時代といわれる現代にあわない民法です。家族も大事という人もいいんですが、家族だけといったら、今、やっつけていけない時代になっています。自分のために時間を使う。自分のためにおしゃれをする。そういうことは、人間ってとても大事です。こういうことから始めると早く自立できます。経済的なことだけでなく、人間として、女として、どう生きるかと今、とても問われる時代です。

(国二回)



幼児教育科開設二十周年記念会

盛大に開催される

昭和四十八年四月から、キリスト教の精神に基づいた保育者を養成することを目的として開催された幼児教育科は、今年で二十周年を迎えました。これを記念して、短大付属幼稚園に勤務している卒業生と幼児教育科教務職員が中心となって実行委員会を結成し、去る六月二十六日(土)に短大礼拝堂及び四号館食堂で開設二十周年記念会を開催しました。

当日は雨天にもかかわらず、小玉敏子学長をはじめ幼児教育科の産みの親であられる元学長の林淳三先生、初代科長の安藤寿々代先生、そのほか約三十名の教職員の方々のご出席を頂き、卒業生約二百三十名の参加を得、大変盛大のうちに記念会を催すことが出来ました。記念式典では小玉敏子学長からご祝辞を頂き、礼拝に続いて国際的オルガニスト岡部慎良氏による、パイプオルガン演奏を聴きました。記念パーティーは会場を四号館食堂に移し、実行委員を代表して一回生の根津美英子さんから歓迎のことばがあり、林先生のご祝辞と安藤先生の乾杯の音頭で賑やかに始められました。会場は溢れるばかりで、一回生から十九回生までグループに別れての懇談が始まりました。

それぞれのグループごと、久しぶりの懐かしい再会に歓声があがったり、特に一～三回生の参加者が多く、昔話が華が咲いたようです。中にはお子様連れの方もおり、赤ちゃんを中心に子育ての話に夢中になったり、それぞれの園での仕事ぶりを話し合ったり、懐かしい先生を囲んで親しく話し合ったり写真を撮り合ったりなど大変賑わいました。(23ページへ続く)



香葉室

この欄は、卒業生の皆様の消息、感想文、等の発表の場として用意いたしました。今回も引き続き、昨年の講演会出欠通知から無断で転載させていただいておりますが、短大香葉会「香葉」編集局宛、次号への原稿などお送り頂ければ幸いです。

今年四月より、新しく幼稚園をかわり、気持も新たに頑張っています。現在三才児の担任です。我が家の一人息子も保育園生活最後の年となりました。来年からは小学生だなんてウソのようです。今年是最後なので父母会の会長をひきうけたり、市内の連絡協議会で担当になったりと忙しい毎日です。たくさん学ぶことばかりですが、子供がすくすくと守られ成長していることに感謝する日々です。短大とってもなつかしい…。

(幼教6 辺土名尚子)

また今年も「香葉」が送られて来る季節になり、なつかしく学生時代を思い出しております。

息子が大好きな電車のビデオに出てくる「シーサイドライン」が短大の近くを走っているんですね。ずいぶん様変わりしたんだと驚いています。息子に「シーサイドライン」を見せたら本当に喜ぶだろうなあ…。(息子は三才です。)(宮崎市在住)

(家政24 加藤清子)

一九九二年度の「女性と生活文化」の公開講座を受講中です。学院に入ると緑の木々が

美しく、学生時代に逆もどりした様な気分になれます。本当にこの学校を卒業できて良かった心から感謝しております。

学生時代、担任だった小玉敏子先生、学長就任おめでとうございます。

(英15 熊谷君代)

毎号「香葉」を楽しみにしております。薄い小冊子なのに内容盛りだくさんで、卒業生の御活躍や学校の発展を知るにつけ、私も誇らしい気持ちであります。

二一号で安藤寿々代先生のお元氣な御様子で紹介され、とても懐かしく思い出されました。音楽のソルフェージュの授業のピンと張りつめた空気、「落第!!」の一言…でも一歩教室を出るととても気さくな優しい先生で、卒業パーティーでピアノを囲んで皆で自作の歌を唱ったのも良い思い出です。

あと瓜果先生はお元氣でいらっしやいますか、お目を悪くされたと聞いておりますが…両先生の授業の大切さは、現場に出てみてよくわかりました。

また同窓会等でお会いできるのを楽しみにしています。

(幼教10 根本千波)

安藤先生の音楽とともにを拝読し、ふと先生の音楽の授業を想い出しました。まったく聴いたことのない曲を突然流され、「この曲名は？」という、それまで経験したことのない試験です。しかしこの方法で私は心で聴くということを知った気がします。

夏休み前に「カナダで乗馬をして参ります。」といっておられた先生、あいかわらずお元気そうで大変嬉しくなりました。

(英33 成重佐由利)

先日(10/15~10/17)三年半ぶり、いえ四年ぶりでしょうか、とにかく久しぶりに機会があつて横浜と鎌倉に行きました。懐かしい反面、在学していた頃とはすっぴかり変わりました。私の住んでいる田舎町でさえ、年々その姿を変えていっているのですから、横浜のような都会が様変わりするのも無理ありませんね。

今回は残念ながら、短大付近に行くことができませんでしたが、また機会があれば是非ゆっくりと散策してみたいと思っております。学校周辺わくわくMAPを持って。

(幼教6 川面さゆり)

香葉ありがとうございます。いたたくたびになつかしく拝見しております。今回も上市先生の覚え書の中に、相川・柳生・光畑諸先生方の写真を見せていただき、当時は思い出しました。その中に嵯峨沢館のリトリートのことを書いて下さっていますが、よく記録していただけたと感動しました。リトリートは親しい友達が行かず、ちよつと寂しかったことを覚えております。その後、狩野川台風で流され、当時のおもかげのないことまで書かれていましたね、私はその前を時々通るので、そのたびにリトリートのことを思い出しているのです。すばらしい先生方と友達に出会えた学校でした。

(英16 天野京子)



先日、薬用植物園に行って先生の説明を聞いて来ました。「キキョウ」は根の部分煎じると痰をきり、「おみなえし」は化痰止め、「くず」は肩こりを直すそうです。ヨモギ・菊・ラベンダー・レモン・みかん等は気分をリラックスさせてくれる成分が含まれているそうです。早速、昨夜ペパーミントの束を浮かべて入浴しました。世間は目まぐるしく変化しているというのに、こんな小さなひと風呂で、幸せを感じるこの頃です。

(英13 山下佳子)

夫一人、娘二人、息子一人の家族。上の娘(同居中)は結婚し、来年三月には、私も人並みにおばあちゃんの仲間入りの予定。水曜日には、G16と云うボランティアの会に入つて近くの老人ホームへ午前二時間のお手伝い。木曜日には手話の勉強、まだ学んで日が浅いので二つ覚えても次の週には一つわすれるのくりかえし、金曜日隔週、午前十時半から十一時半、横浜長老協会で聖書の勉強会に参加。午後はボケ防止のためにと最近はじめたピアノのレッスン。十一月の発表会にむけて特訓中です。

(英6 山本美子)

コーヨースポットライト

昔遊女の聞き書き

竹内智恵子



「むかしを振りかえってばかり居ては生きちゃ居れんが、でも、時には過ぎた日 pensando 思うて現在の

幸せを噛みしめ感謝する事も大事やよネ」
今年米寿を迎えた一人の昔遊女の言葉です。ふとした事から昔遊女の聞き書きをする事になったのは、北の都の春風堂と云う古道具店でツボを求め、その包み紙が、古い奉書紙ほうしよがみで、何気なく眺めて居たら、これは廓の妓の稼かせぎを記した物でした。

私の聞き書きの最初の道しるべ——それから沢山の資料が与えられ、A氏の紹介で、一人の昔遊女と出逢い、以来十五年、昔遊女の方々の交流が続いています。

歴史の裏側に、ひっそりと生きて来た人々、決して明るい世界に出ようとしなかった人々が、訥々ちちちと廓むかしを語るようになってから、

私は只耳を傾け、静かに聞く事が、私にとつての唯一のつとめであると思いました。田舎の一主婦が、聞いた事もない様な廓独自の言葉に戸惑い、陰惨な廓なかでの出来事など耳にする時、自分自身が其処に身を置いた様な錯覚をして身震いし、只聞くことが、どんなに心を痛めても、語る当人の受けた痛みには程遠いものであり、慰めの言葉など口に出せない状態でした。

私自身、聞き書きをする気持ちもなく只、相手が語る事を聞く丈の事で、いつか時が経ち、最初の思いとは別に、書き残す事が大切な私のつとめなのではないか——と思う様になったのは、昔遊女の方々八人と交流がはじまって、自然な流れの中で、方向づけられたような気がします。

「若い娘が、両親の借金の為に、僅か米五俵で人買いのおんじに連れられ北の都に売り娘となつて来た、これが私の女郎の出発やっただすがあ」

話す人は、淡々と語り、聞く者は、首うなだれ、何度涙を流した事か。

「親の為に仕送りをして、弟の為に追借金をし、身動き出来ぬ程の借金で、親の側に居た年数より、廓で生きた年数の方が、倍にも

三倍にもなつてしまつて、故里恋し思うても、弟妹は、村の衆の手前も有るで、帰つて来られちゃ困ると云うて、私の知らん間に、戸籍まで抜いてしまひおつたサ」

最初に逢つた昔遊女は、或る時、ポソツとつぶやき笑つた。その笑いは決して暗い笑いではなく、私が驚く程明るい笑顔だった。

「むかしを平気で語れる様になつたのは、自ら親兄弟と縁を切つたからなのさネ

だがネ、童の頃遊んだ川や野原とは縁は切れず、あの川が恋しくて、あの野原が懐かしいて今でも泣きたくなるんだいネ、汚れない童の私が生きている川や野原なんだものネ、年老いるに従つて、余計に故里の自然が恋しくなるみたいだよワ」

これは、ポソポソ花を語つてくれた人の言葉である。

廓の習慣や、廓なかでの朋輩ともばい達の争い、又、廓でしか歌われなかつた廓いろは、など次々と語られる間に、ふと夫々の童むかしを、目を細め優しい声で話す時、みんなは夫々の故里で幼な子になつて心を遊ばせている。

いつしか、その故里の方言で本当に楽しんで童むかしを語る時、私も共にその世界に入りこみ童うたなど一緒に歌わせて貰い、い

つか、三ツ四ツと覚えてしまっていた。

メモやテープは、最初から使わずに來たの廊なかの廊うた、など幾度も聞き共に唄つてその音を頭の中に叩きこみ、帰つて來てから忘れないうちにテープに入れたのがどの位になったか。中でも私の好きなりたは、

夢は寝てみる 起きたら見るな
起きてみる夢にや 泣かさるがおちよ
くるわおんなにや 夢さえも見れぬ

サー ホイ

これは、東北のずつと北の山国の杣人の山唄の節が、廊なかで誰かが言葉をつけて唄っていたのが代々伝わったようである。

私自身昔遊女に逢つて耳を傾け昔語りを聞くうちに、その世界に生きた人の心の強さと心の澄んだ美しさを知らされたと同時に学ぶ事が多く、仲間を大切にする心の優しさには泣かされる事度々であった。

「仲間を大切にすることは、自分を大切にすることなのさね、みんな同じ売られ娘のむかしを持って、みんな身内に捨てられ、この身で稼ぎ娘時代は、一夜姫で夜毎異なる男さん相手に過ごし、男を恋する純な娘には到々なれず年老いた独り者同士、深く残った傷をお互いに、なでさすつて生きてますでネ——」

一番年老いた昔遊女の言葉である。

聞き書きをはじめて十二年目、ふとした事で吉武輝子さんのお口ぞえで未來社から、この聞き書きを出版する事になった時、昔遊女の皆さんに相談をした。

誰一人反対する人もなく、「闇の中にあつた遊女の生きざまを正直に語つて來た私らだもの、明るいところに出して下さいよワお役に立つなら、何でも話しますよワ

買春禁止令で、借金棒引き云う法令は、表面きで、私ら弱い者達皆郎で借金しとつた分、ちゃんと支払いさせられた事だつて、全て裏の話して誰も知らん事でしょうヨ 等々」

一九八九年、昭和遊女考 として一部が出版、一九九〇年、鬼追い、一九九一年、鬼灯火の実は赤いよ、一九九二年、娑婆恋どりと四部作が完結と云う形で出版された。

まだ聞き書きは続いているけれど、此の間に三人の昔遊女を彼岸に見送つた。

その誰方も、別れは悲しかったが、お辰さんとの別れは去年の事なので、まだ悲しみは残っている。「江戸よりまだ南が私の在所」と、きれいな言葉で話す人だった。

「娑婆恋どり」はお辰さんの目に触れる事

なく心残りであった。

「女郎教育勸語」の四分の一はお辰さんの正確な記憶に依るものであつた。

はるか遠い故里を想つて唄つてくれた童唄、声の澄んだ美しい人、

随分多くの教えを受けた、
学校では学ぶ事の出来なかつた人生の哲学を学ばせて頂いた、私の師の一人であつた。

三春台の短大に通つていた私は親許を初めて離れ、週末となると早々に会津の母の許に汽車の中でもかけ足をする様にして帰つて来た駄目な私、時田先生に「そんなに毎週帰るなら、もう学校止めなさい」と笑い乍らお叱言を頂戴した事が有りました。先生にも読んで頂きたかつた。

私の仕事はこれからもまだ続きます。

多くの方々の御指導で、健在な昔遊女や、昔女将、昔赤前垂の方々から沢山の証言を伺い乍ら、私の出来る範囲の小さな力で、コツコツと今迄と同じに聞き書きの旅を続けて参ります。

(英一)

半世紀にわたる私の英語独学法

小林守信

七年前に定年になってから、米国系企業の東南アジア駐在を経て、現在ドイツ系住宅設備機器メーカーの日本子会社に勤めている。

同社は、台所、浴室用の蛇口などの輸入販売、サービス等を主に取り扱っている。

現在、年に数回、十頁位の本社向けに英文で「業務報告書」を出す。年商約数百億円の同社海外営業部は、全世界に広がる約二桁の子会社の販売活動を統括している。当然、社内業務連絡は原則的に英語で行っている。それは米語より英語に近い「大陸英語」、または「国際英語」と呼ぶべきものである。Colour、やProgramme、が代表例の一部である。本社との間で毎日ドイツ語／大陸英語の文書が行き交う。

それらを、完全に理解するか否かは、文書上だけや、英語の読解力だけの問題でない。

例えば、日本の取引開始に際して必須の印刷物である「会社概要書」等、本国の商習慣に無い資料の作成の売り込みもふくまれる。しかし、英語で書いてその文書のみでその中心思想の伝達が出来ることと、その分野でのビ

ジネスの専門家である事は別である。

最近英語で、報告書をFAXで送ると、その日の内に駐日スタッフに、内容確認の電話がかかって来たりする。しかし、文化、国情の違い本社とのコミュニケーションなどはどちらにとっても外国語である英語を介しての「意志疎通」は、なかなかむずかしい。

結局、ある案件が始まるときは最初は長く、かつ詳しく書かないと、その内容は理解されない。また、他方技術用語を英語に翻訳するのは、ドイツ人技術者でも時間がかかるし、ドイツ人秘書もバイリンガルでなくては成らず、商業英語の達人の彼にも、技術文書を手早く訳す事は、単語帳があつたとしてもその分野の基礎知識が無ければ不可能に近い。

単語の選択の誤りで、誤解が生まれることも珍しくない。例えば「Pruning」は「適果」という意味がまず私の頭にあるが、それを本社の営業部は「機種整理」という意味に使ってくる。

この様にして、現在私は「英文報告書」を書いたり、「就業規則」を訳しているが、ここにくるまで私の英語は五つの段階があつた気がする。

私は、戦後すぐに横浜のYMCA英語学校

のタイブ科に、一日だけ出席して、辞めた。

そのコースは、「ブラインドタッチ」の練習から始まった。当時進駐軍に占領されていた横浜伊勢佐木町の松坂屋ビルに勤めながら三春台に通学していた私は「事務所で慣れた方がよい」と思った為である。勿論、頑丈なミスコロナの卓上型手動タイプの全盛時代であつた。

次の段階は、三春台の短大卒業後、青山学院大学の英米文学科に編入してからである。当時は、旧制青山学院高商部の匂いの強かつた同校のせい、私の実用的な勉学の興味の中心は、尾崎茂文学部長担当の「商業英語」であつた。

当時は、学生用の英文タイプライターの不十分な時代なので、この教科の宿題は、わら半紙に青インクで、「プリントスタイル」で手書き作成して提出すれば、採点して頂ける時代であつた。

三春台の家庭的な短大時代と比べて、「東京の都心の新制四年制大学の教育内容、組織、規則、及び学生の取扱は一段と厳しい」との強烈な印象を受けた。

更に次の段階は、宣教師に助けて頂いて、友達に負けまいと一念発起して、米国中西部

の州立大学に五年ほど留学したことである。太平洋をプロペラ機で渡米し、「理論航空工学」を専攻したが、その時の「科学技術報告書の効果的な書き方」の科目は、現在でも、一番役に立つものの一つである。アメリカでもその頃は丁度、IBM電動卓上型タイプの出始めであった。

ローマオリンピックが終わった頃に帰国した当時、私は自動制御機器製造の日米合弁会社に入社した。まだ日本のオフィスには、白いミスタッチ修正液がない頃で、輸入電動タイプも余りにも高すぎた時代であった。

五枚コピーのもの等タイプするときは、指の力もいったが、「タッチ」を間違えると、修正作業が大変であった。まだ乾式複写方式（ゼロックス）なども無かった頃である。勿論、足踏みスイッチつき「デクタホン」等は、社長室でも高根の花だった。

それから、中国、英国、ブラジル、メキシコ、インド、タイなどの諸国及び米本社傘下の工場、サービスセンターなどの製造、サービス業務販売等も含めた技術転移の業務に英語を活用した。

第五段階として、定年近くになった私の英語独習法に取って「一大革命」が起きた。

それは「英文ワープロ」が身近につかえるように成ったことである。それまでは、例えば、「LRPS」と呼ばれていた長期戦略計画を毎年米本社にOHPフィルムとして発表するには、まずパドミントン式プリントホイール交換方式の電子タイプライターで原稿を作る。

いろんなフォントの印字ホイルを交換しながら、タイプを叩き続けたものである。だいたい、三カ月前から初稿の仕事を始めた。英文タイプストは、一部修正といえど全部打ち直しをしなければならなかった。まだまだ、電子式記憶付き携帯型電動タイプは、メモリー部分が高すぎて我々がオフィスでも触る機会など無い頃であった。

だから身近になった日本電気製の16ビットパソコンに載る「英文ワープロ」は、初稿から完成までの省力化、スピード化としては、まさに画期的なものであった。

最初に使えたのは、WS（ワードスター）というIBM用のソフトプログラムであった。使いはじめは、原稿をフロッピーディスクにこまめに記憶させる前に、間違って電源を落としてしまったこともある。あわてて、深夜に至るまで、繰り返し二十頁程の「自動弁の

取扱説明書」を入力し、完成させた。翌朝、別のフロッピーディスクに記憶されて入っていた事実を発見した、などの笑い話もあった。とにかく省力化に力を発揮したのは「スベルチェッカー」や「シソーラス（類語辞典）」のソフトウェアの活用である。字引を引かなくなったのはこの頃からである。

頭の中に浮かんだものを、タイプして後は、ワープロがパソコンの上で修正してくれるのだから、俄然、私の英文製作の生産性が上がった。一年で五センチ厚みの発信ファイルに一杯に成る程度でしかなかったものが、今や二カ月で同じ厚みのファイルが一杯に成るくらい書く。勿論ファクシミリの返事の早さによるビジネスのスピード化のせいもある。

「ワープロソフト」と併用しているのが、作成した英文の出来具合を、点数制度で評価する「ライトライター」というものである。このソフトは、「米国防省の軍事文書作成マニュアルのための手引書」をプログラム設計の基礎にしている。こんなに英語が評価できる方式があるなどとは私には当時信じられなかった。

これによりアメリカ英語の読解力、説得力、難易度について、徹底的に教え込まれた。

「単文、能動態の使用」を何度と無く、このソフトに注意された。繰り返しして私の英作文手法を修正して、このソフトの気に入るようにすると、評価点数が上がり、最後の作品は自分で読んでみても論理的にもすっきりと読めるのが不思議であった。なんとなく難関を乗り越えた感じがした。これは年齢とか、定年に関係無いことにも気が付いた。

ある時、会社を売買する(M&A)交渉の基本計画書を作らされたことがあった。原稿をまだ珍しかった自宅FAXで受け取って、英文計画書の完成品を二カ月後に提出する、シングルスペースで四十頁ぐらいの仕事である。十五回ぐらい自分でも、反吐の出るくらい書き直して「ライトライター」でチェックして、高校三年生レベルで読める程度にしてから、念のために、アメリカの知合いの高校の英語教師に送って、再チェックしてもらった。

この結果、色々の事がわかったが、彼女の修正どおりにして、「ライトライター」にかけ評価すると、文章の難易度は高校二年程度に下がり、猶説得力が逆に良くなり、十点中二点も上がったのを見てびっくりした。難易度は、どの学年の知識で読めるかを示し、だ

いたい高校卒程度が通常のコレボンの狙いどころである。

それから、独学もできる英文ワープロやその周辺の検定プログラムに徹底的に惚れてしまった。

現在使っているのは、WP(ワード・パーフェクト)というプログラムである。またこれを使いこなすのに二三年かかりそうであるが今度は、「top card」記事の中でも最初の字を大きくできたり、野線のはいつた表の整頓ができたり、引用句をabc順(昇順)に並べ変えてくれたり、目次の作り方にも、法律事務所風とか、index(ブリック)等の使い方を教えてくれる。

こんな仕事をしていると、段々英語で物事を考えるのが楽になってくるのも不思議だ。「歳と共に物忘れすること」と「このワープロの使い方の習熟の勉強」は不思議な取り合わせだ。

(II 英一)

予約申し込み受け付け中 卒業生新名簿完成(1994年度版) 一冊 3,000円

現代のコンピューター技術を駆使して読みやすくそしてより正確な最新情報をインプットした新名簿ができました。お手元には非一冊どうぞ。

同封の振込用紙でお申し込み下さい。



クラブス会報告

女専英文二回卒級会報告

出 榮美子

一九九二年十月三十一日(土) 晴天
相生にて 出席者十三名



原さんと石田さんが同時期にお里帰りなさいましたので、いつもの如く、昼食会を兼ねて夕方まで集まりました。

学生時代の思い出話や現況報告がひとわり済むと、我々、女専の強者たちは相変わらず社会問題、国際政治問題など、子供や孫の話よりずっと活気を帯びて白熱のお喋り。ミミ子ちゃんの博学と過激な喋りには、皆が婦人議員に立候補するよう囁いたりしました。

石田英子さんには四十数年ぶりにお目にかかったのですが、外見は普通通りでした。男一人女三人のお子持ちで、今は大学教授の御主

人と二人でウィスコンシン州の美しい所に住み、日本語の個人教授をしていらっしやるそうです。

原さんは、昔に変わらぬエネルギーで、お子さんは男女二人、大学教授の御主人はテレビ局の副社長もなされていて、NHKとも関係が深く、日本の紹介をして下さっています。

アメリカは広大で、諸外国からそれぞれの習慣、気質を持って移民を重ねてで上がった国ですから、原さんの住む近代的なボストン辺りと、石田さんのヨーロッパ農民出身者の多いウィスコンシン州では、隣人に対する態度もまったく異なっているようです。

アメリカ国内の不況にいらだっているアメリカ国民に、日本人は無神経な対応をして、避けられる筈の嫌な事件を招かぬように。外国に生活している人々の歴史、生活習慣を他人事として捕らえず、良く学んでから接するよう心掛けねばなりません。外国まで行かなくても、既に日本国内の自分の家の近くでさえ、他国からの人々に接しなければならなくなっているのですから。

長い間、アメリカで生活をしていらっしやる級友達のお里帰りは、私達に一方的に伺う有名な講演会に出席する以上の、「ために

なる情報交換」の場であり、親睦勉強会であり、六十代の心の青春発揮の場であります。

飯吉さんが経営者でいらっしやるお蔭で『相生』がいつでも利用させて頂け、今回は社長さん自らお茶を運んで下さる程、極上のサービスを受けました。それぞれ御尽力下さった方々、ありがとうございます。

(15ページから続く)

やかなパーティーになりました。立派に整備された校舎を見て、今の学生さんは幸せだと実感をこめて話していた卒業生もおりました。

また香葉会の支部とでも云うか、幼児教育科の卒業生の会を結成してはとか、幼児音楽コースの卒業生からも時々集って勉強会らしきことをやりたいと云う話も出て、是非実現して頂きたいと思いました。

六時半ごろ閉会になりましたが、別れを惜しんで二次会に出掛けたグループがいくつかあったようです。

悪天候にもかかわらず、教職員の方々ははじめ多勢の卒業生の参加を得て盛会のうちに二十周年記念会を催すことが出来ました。実行委員の皆様、本当にご苦労さまでした。

幼児教育科長 中田弘良

幼児教育科 第十三回卒業生(昭和61年度)



平成四年九月五日(土)午後六時より、桜木町にありますとあるパーティールームにて、卒業六年目にして、初の同窓会が行われました。

A組四十四名中二十四名名が出席、そして特別ゲストとして、当時アドバイザーであり、大変お世話になりました中田弘良先生も御出席下さり、予想以上の盛り上がりを見せました。まだまだ現場にて、現役保母、幼稚園教諭として頑張る者、キャリアアウーマンとして、バリバリ働く者、専業主婦として子育てを満喫している者。懐しい顔、顔、顔。皆それぞれの人生を歩んではおりますが、

中身、心意気は昔のまま。。

学生時代と変わらぬ同じ話し方、笑い方で、五年間のブランクも何のその、一人一人、あの頃の自分自身にタイムスリップ。。

共に過ごした青春時代を思い出し、楽しい一時を過ごすことが出来ました。

次回の幹事も決定し、「又会おうね」と口々に、笑顔で別れました。

本当に又来年会えることを楽しみに。。

御出席下さった二十四名の皆様、頼りない幹事ではありましたが、御協力誠にありがとうございました。

この場をお借りして御礼申し上げます。

中田先生、又来年会いましょう。

(短幼教二A) 飯山尚子

短大英文科三回生クラス会

一昨年のクラス会は、一泊旅行で楽しい思い出が残りましたが、出席者が少なく、残念でしたので、今回は便利な場所に致しました。十八名の皆様と四人の先生方にも御出席戴き大盛会でした。

先生方のお若い頃のロマンスの秘話やらをお聞かせいただいたり、既に還暦を迎えた方又これから迎えられる方もいらっしやいます。



だが、三十八年ぶりに学生時代に帰り、楽しい一時でした。先生方がこれからお元気に過されます様、そして又皆様方との再会を願って会を終わりました。

於 横浜ルミネ七階「大志満」

平成四年十一月二十六日

(短英三) 内島三重子



夜来のはげしい雨も止み、すがすがしい五月晴れの五月二十三日、恒例の短大二回卒生の同期会、さつき会が、鎌倉、銀座アスターで開かれました。懐しい顔ぶれが十五名、元氣に勢揃い、

賑々しく昔にかえって、つもる話、今迄の出来事、丸テーブルを囲んでの近況報告、大病を克服された方、両親を無事に見送られた方、すでに未亡人に。退職して悠々自適に。偶然住まいが近く親交を暖めている人達、はるばる出張からかけつけて下さる友、又、アメリカ、カナダの旅を満喫した御夫婦、退職早々

の御主人とイタリア旅行を楽しまれた方、スペイン、ポルトガル、モロッコ旅行を終えたばかりの三人グループ、海外旅行経験者の話に花が咲き、中華料理に舌づつま乍ら、和氣満々のうちに過ぎました。思えば既に還暦も過ぎ、ここまで何とか無事に来られた事に感謝し、これからの日々を一層大切にして行き度いと思うばかりです。

お腹も出来、鎌倉の街を散策、段葛の前で記念撮影したり、八幡宮境内国宝館でのシルクロードのみほとけたち展を見学し、遙か古代のロマンに浸り、鎌倉独特の小路をめぐり、手造りケーキの美味しいお店で疲れを癒し、別れを惜しみつつ次会を約束しました。合言葉はいつも「元氣なうちにお会いしましょう」。

来年も又一人でも多くの友人と集える事を願いつつ。

(短英二) 中西(川勝) 愛子

県央のつどい

小林 麗

第十二回目の「県央のつどい」は、平成四年十一月二十一日今をときめく我が関東学院大学ラグビー部監督の春口先生をお招きしての講演会で始まりました。ラグビー部OBやラグビーに憧れるOGで会場は満杯、幹事一同胸をなでおろしました。翌日に宿敵法大との試合を控え、超ご多忙な時間を割いて私達の為にお話して下さいました。専用のグラウンドはおろか、他のクラブの練習に押されほんの片隅しかつかえなかつた部創設時から、今日の栄光に至るまでのファイト溢れるお話は、聞く者皆の胸にこたえるものがありました。それはスポーツばかりでなく私達が生きていく上での指針ともなりました。そして皆が愛校心に燃える日でもありました。

(英五)



母校ニュース

▽新任教職員紹介



山崎 稔恵先生

家政科 講師

服飾デザイン、服装文

化論、色彩学等担当

日本女子大学 卒業

大豆生田 啓友先生

幼児教育科 研究助手

教育実習Ⅰ、保育実習

指導、保育実習等担当

青山学院大学 卒業

荒木 由美さん

家政科 教務職員

関東学院女子短大

家政科 昭和六十二年

卒業

高橋 由香さん

教務課 事務職員

関東学院女子短大

経営情報科 平成五年

卒業



逸見 義顕さん

図書館事務課

事務職員

関東学院大学

文学部 平成五年卒業

▽学院長に石田昭義六浦中学校長先生就任

ヒンチマン学院長が平成四年十二月三十一

日をもって任期満了、ご退任された為、この

五月二十二日開催の関東学院評議員会におい

て、石田先生が選任され、六月一日より学院

長となられました。就任式は六月三日、大学

礼拝堂で行われました。尚、六浦中学校長も

兼任なさいます。

又、四十四年間在日宣教され、その内四十

一年間という長きに渡り関東学院に関わって

こられた、B・L・ヒンチマン先生は、一月十

五日に米国へ帰られました。気品に満ちた先

生のお姿、説教はいつまでも私達の心に残っ

ていくことと思います。関東学院（合同）同

窓会より感謝の品を贈りました。

▽二級建築士及び木造建築士の受験資格認定

される。

家政科生活文化専攻が標記の受験資格に関

する基準に適合するものと、神奈川県より認定されました。これにより二級建築士、木造建築士の受験基礎資格を取れることになりました。

▽管理栄養士試験に本年度十五名が合格

本年五月十六日に行なわれた管理栄養士試験に、左記の同窓生の方々が難関を突破して合格されました。おめでとうございます。

黒川和美・速水裕子・里見直子・宗方弘子

橋本千秋・渡邊孝子・百合本真弓・小島幸子

新福裕美子・横川和美・下川香苗・宮坂順子

徳野麻有美・久保田千草・又市三千代(敬称略)

これからの活躍を期待いたします。

編集後記

原稿の中に埋れながら、一生懸命で字数と格闘した二十二号。決められたページ数のなかで、投稿された文章が生きるようにと苦心しています。皆様の原稿を楽しみにお待ちしております。又、編集委員も募集しておりますので、香葉会事務局まで御一報をー！。首を長くしてお待ちしております。

平成4年度決算				平成5年度予算
収入の部	子算	決算	増減	子算
会費	(@18,000×856) 15,408,000	15,408,000	0	(@18,000×973) 17,514,000
賛助金	500,000	847,087	△ 347,087	500,000
預金利息	50,000	12,000	38,000	10,000
雑収入	5,000	42,959	△ 37,959	5,000
前年度繰越金	3,753,441	3,753,441	0	2,976,096
振替収入	524,031	524,031	0	—
合計	20,240,472	20,587,518	△ 347,046	21,005,096
支出の部	子算	決算	増減	子算
通信費	2,300,000	2,041,601	258,399	2,300,000
印刷・製本費	2,000,000	1,481,927	518,073	2,000,000
総会・会合費	2,200,000	1,735,957	464,043	2,200,000
交通費	500,000	387,435	112,565	500,000
用品費	150,000	143,072	6,928	150,000
備品費	100,000	48,954	51,046	100,000
委託費	750,000	722,298	27,702	800,000
謝礼費	350,000	36,180	313,820	350,000
消耗品費	50,000	64,449	△ 14,449	80,000
人件費	2,450,000	2,425,765	24,235	3,000,000
合同同窓会分担金	(@300×856) 256,800	256,800	0	(@300×973) 291,900
新入会員歓迎費	1,500,000	1,413,160	86,840	1,500,000
慶弔費	700,000	359,465	340,535	700,000
新規活動準備金	550,000	480,000	70,000	(香葉会奨学金) 720,000
雑費	33,672	8,977	24,695	13,196
予備費	350,000	5,382	344,618	300,000
特別会計	2,000,000	2,000,000	0	1,000,000
名簿発行準備金	4,000,000	4,000,000	0	5,000,000
(小計)	20,240,472	17,611,422	2,629,050	21,005,096
次年度繰越金	0	2,976,096	△ 2,976,096	0
合計	20,240,472	20,587,518	△ 347,046	21,005,096



先輩諸姉へ求人のお願い

本学卒業予定者の就職活動につきましては平素より暖かなご援助、ご協力をいただき感謝申し上げます。おかげで毎年、たくさんの求人をいただき、希望者のほぼ全員が職を得、晴れて学窓を巣立ってまいります。

ところで昨今の国際化の進展に伴い、本学にも外国人留学生が毎年数名入学しますが、これらの学生の就職活動は困難を極めております。つきましては、母国語と日本語の最低2ヶ国語を扱う彼女らにも就職の機会をたくさん与えたいと存じますので、求人のお話がございましたら就職課にお知らせくださるようお願い申し上げます。

〒236 横浜市金沢区六浦町4834 Tel (045) 787-7868

関東学院女子短期大学就職課

香葉 第 22 号

平成5年9月25日 印刷・発行
関東学院女子短期大学・香葉会
代表者 古城 朋子
横浜市金沢区六浦町4834 郵便番号236
関東学院女子短期大学内
電話 (045) 787-7859

關東學院同窓会・香葉会誌